

はじめに

私たち（福山市多文化共生の場づくり推進委員会）は、2011年度から2か年事業として「広島県新しい公共の場づくりのためのモデル事業」を実施していますが、その事業名称は、「多文化共生センター設立推進事業」です。

事業目的は、「外国籍市民間の交流を促進し、多様性を生かしたまちづくりを推進する」ことです。また、事業概要は、「外国籍市民が気軽に集える場づくりを具体的に進め、この事業の終了時点で『多文化共生センター』を設立し、多様性を生かしたまちづくりの推進拠点をする。その運営は、外国籍市民と NGO/NPO が担う」ものです。

そこで、この事業の一環として、2011年度は、民設民営で「FM わいわい」、「多言語センター FACIL」、「ワールドキッズコミュニティ」、「ひょうごラテンコミュニティ」、「NGO ベトナム in KOBE」等の活動拠点となっている「たかとりコミュニティセンター」（兵庫県）への視察を行いました。

今年度は、6月28日（木）、公設民営のモデルケースといわれる岐阜県「可児市多文化共生センター（愛称:フレビア）」(<http://www.ctk.ne.jp/~frevia/>)へ視察に行きました。このセンターは、可児市が建設し、「NPO 法人可児市国際交流協会」が運営していますが、参加者一同多くのヒントを得ることができ、「福山市多文化共生センター」設置へ向けて大きな刺激を受けました。

参加者のみなさんの感想も含めた報告書ですが、今後のセンターづくりの参考になれば幸いです。

なお、視察参加者は、次のとおりです。

- 劉 郷英（福山市立大学教育学部・中国籍）
- 前田ミチコ（アミーゴ地球市民 DJ・ブラジル籍）
- ト部 ユン（ふくやまベトナムの会・ベトナム籍）
- 高橋 雅和（福山市人権推進課・日本籍）
- 常友 浩子（福山市松永生涯学習センター・日本籍）
- 村田 民雄（NPO 法人 e&g 研究所・日本籍）



正面玄関



事務所受付



研修案内

も く じ

| | | |
|--------------------------------|-------|----|
| はじめに | | 1 |
| 視察参加者 劉郷英先生に聞く | | 3 |
| 視察研修報告書 | ト部 ユン | 6 |
| FREVIA 訪問の感想 | 前田ミチコ | 10 |
| 可児市視察研修に参加して | 常友 浩子 | 11 |
| 可児市多文化共生センター・フレビアを視察して | 高橋 雅和 | 13 |
| 福山に魅力あふれる多文化共生センターを | 村田 民雄 | 16 |
| ◇資料 | | |
| 可児市多文化共生センター リーフレット | | 17 |
| 平成 24 年度重点事業 | | 18 |
| 日本語学習支援・就学支援などの事業 | | 19 |
| 2011～2015 年度 可児市多文化共生推進計画（概要版） | | 21 |



国政交流コーナー



研修室での説明



← 通路壁面 ↑



多目的資料室

視察参加者・劉郷英先生に聞く

* 可児市多文化共生センターの印象は _____

可児市の多文化共生推進計画で、一番印象に残っているのは、市の施設ということもあるんですが、行政側のサポートが何よりも大きかったことです。しかもセンターを造るためのサポートだけではなくて、自分の地域の状況、つまり、これほど沢山の外国人労働者が入って来ているのですから、どういう風に共生すればいいかは、試行錯誤しながら、まず市の重要な事業として取り組んだということは、一番魅力的だと思います。

勿論他の地域、例えば、福山市の場合もいろいろとやっていると思うんですが、しかし福山市の重点的な事業としてどうすればいいかはこれからの課題ではないかと思うんですよ。

向こう（可児市）は年数があるので、あれもこれも実践の中から生まれたもので、建物も含めてセンターが結晶としてできた。これに対して、福山市ではこれから何をするかということです。

やはり行政が関与しないと大きなものにならないと思う。向こうの一番重要なのは市長の方針で、まず市として方針を出して、それを実施するというのが一番大きかったと思います。したがって、福山市がどういう方針を出すかというのは大きいですね。

* 魅力を感じた事業は _____

子どもたちへの支援を徹底的にやっていますよね。例えば、就学支援事業は月曜日から毎日しています。夜の6時から9時まで中学生補習教室とか、いろんなレベルに合わせて徹底的に実施しているというのは、非常に素晴らしいですよ。

（福山の）センターをどうするのかはこれからの課題ですが、なぜ教育のことをやらなければいけないかと言うと、これからの福山の市民を育てるためです。そのために市の方針としてどう考えるかの問題です。ただ（外国人の子どもは）今（日本語が）できないから支援するのではなく、日本人の子どもたちも含めて、これからの福山市民をどう育てるかです。外国人の子どもは一番ハンディーが大きいので、そこに力を入れると、日本人の子どもたちも外国人の子どもたちも共にレベルをアップすることができるんですね。そこはとても魅力的でした。

また、母語教室もあったんです。この子どもたちにとっては、日本語も親の母国語も抜きにしては生きていくことができないので、それを財産として生かしたほうがいいんです。例えば、母語教育の中に日本人の子どもたちも一緒に参加して勉強すれば、それも一つの財産ですよ。

* 多文化共生社会を創る視点と課題は _____

外国人がいるということを負担として考えるのではなく、自分の地域を豊かにする財産として考えていたら、もっとお互いの良いところを伸ばすことができるんですね。それは、福山に多文化共生センターをつくる大きな意味だと思います。それがあつたのとないのでは全然違うので、方針を作つて、福山に住んでいる日本人市民も外国人市民も共に豊かに生きて行くためのセンターをつくらなければならないと思います。

新しい事物が出て来る時に、それをマイナスとして考えるのか、プラスとして考えるのかは全然違うんです。これを逆手に取つてやるのか、負担としてやるのかは全然違います。もっと考え方や意識を変えないといけないですよ。私たちは日本全国の情勢を変えることができなくても、せめてこの地域、福山市をどう方向に持っていくかは地域の力で持っていくことができます。

可児市の各務事務局長さんも言つていたんですが、これからの課題としては、どうやって可児市の日本人市民と一緒にやるかです。今まではずっと外国人支援の立場からやってきたんですけど、これからはそれだけでなく、日本人の市民も豊かにするために、日本人と一緒にどうやるかというのが課題なんですよ。私たちは、むしろ、そういう考えで、福山市の多文化共生を創っていく必要があると思います。

外国人支援については、弱い者に対する支援として考えるのではなく、地域に貢献できる人材育成として考えなければなりません。外国人は日本に来てたまたま弱い立場に立つんです。文化も違うし。しかし、それをハンディーとして見るのか、それとも彼らを私たちにはない文化を持っている存在として見るのか、視点によっては見え方が異なつてきます。異なる文化を持っている外国人の力を発揮させたら、日本にとつてもプラスになるんですよ。そういう風に考えていかないとはいけません。自分は高く、相手は低いという姿勢ではなく、お互いに学びあうという姿勢になれば、福山市も豊かになるし、外国人にとつてもいいことがあるんです。

例えば、カナダが何故進んでいるかと言つると、ネガティブな思考ではないからです。支援じゃなく、お互いに学び合うという姿勢でやっているので、カナダのバイリンガル教育は世界的にも高く評価されています。なぜかと言つると、弱いから、まず英語を教えるというだけでなく、相手の文化、相手の言葉もあるんですよ。例えばフランス語教育も学校段階でどうするかという研究も含めてやっていくんですよ。そうすれば、先進的にみんな高度な二言語を習得することができるんです。

今の時代は、偶然かもしれないが大量の外国人がやつて来て、いままでの歴史の中で経験したことのない多文化になっているんです。これは大きな負担だ、いままで経験したことのない負担だと思つてではなくて、もっと前向きに考えていかなければなりません。せつかく来ているんですから、一緒にやつて行きましょう！

*多文化共生センターに求められる機能は _____

いま市役所の中に国際交流課があるんですよね。むしろ多文化共生センターに国際交流課を移管させて、その中に行政相談のできる部門（例えば、法律相談や、生活相談、日本で仕事をする場合の労働相談など、そういう行政側からサポートできる相談全般を抱える部門）を設置するとともに、次世代育成の立場から、子どものいる外国人家庭に対する育児相談や教育相談のできる部門も設置する必要があると思います。例えば、母国と日本の異なる文化環境でよりよく子育てするにはどうしたらいいのか、子どもが進学するためにどうすればいいのか、どういう学校があるのか、子どもを外国人として日本社会の主人公としてどう育てすべきか等、こうした問題については、行政側も学校側もサポートできていないんです。多文化共生センターにおいて、こうした問題について指導することのできる専門家を置いて、気楽に相談できるような部門が設置できたらいいんですよね！例えば、そこにコーディネーターとしての専任職員を配置させ、職員を窓口にして専門家と一緒に相談を実施するとか。

多文化共生を構築するには、育児相談は大きいんですよね。子どもがいると子どもを育てなくてはいけないので、人間としてどう育てていけばいいか、進学はどうするかなど、細かい相談が多いです。この部門は必ず必要なんです。

*当事者として望むことは _____

多文化共生には、外国人に限らず、世代をどう育成するか、どう教育するか、そここのところは、市民意識（Citizenship）への転換が求められます。外国人を福山市民として受け入れ、彼らは日本人市民とともに福山地域を豊かに創っていく共生人であるという次元で考えなければなりません。私たち大人は先に壁をつくる癖があるんですよね。本来は、日本人であれ、外国人であれ、みな地球の人間として生きているんですよ。外国人の場合、たまたま昔から違う文化で育っており、最近になって移住して来て日本人と一緒に生活しているのです。外国人を市民として育成するには、まず、日本の文化、日本人の生活習慣、日本のさまざまな法律や制度などを理解し遵守させなければなりません。つまり、いい意味での「郷に入れば郷に従え」を守らせなければなりません。一方、彼ら自身の心身から抜き取ることでできない基にあるもの、木で例えれば根っこにあるものをいかに栄養として生かし、さらにそれを日本文化の栄養も吸収させながら大きく育て、彼らを新しい文化創出の担い手として地域社会への貢献者として育てていくかも考えなければなりません。こうした次元で外国人問題を考えることができれば、前向きな姿勢になることができるだろうと考えられます。

多文化ということは、元の文化構造を崩さなければならない作業なので、もともとの秩序が不安定になる危険性も勿論あるんです。だからといって、それを排除することにはなりません。したがって、異なる文化をいかにいい栄養として生かし、活性化させるかは、これからの日本の多文化共生社会創りで考えなければいけないことですよ。

（聞き手：村田民雄）

視察研修報告書

ふくやまベトナムの会 ト部 ユン

日時：2012年6月28日

場所：岐阜県可児市多文化共生センター（愛称：フレビア）

【はじめに】

可児市は、岐阜県の中南部（愛知県との県境）に位置する人口約10万人の小都市です。

岐阜市や名古屋市までの距離が30km程度（電車で約1時間）なので、これらの都市のベッドタウンとして発展してきたそうです。

特に愛知工業地帯の影響で自動車部品の工場が多く、そのため外国人労働者の数も非常に多いことが、とても印象的でした。

実際、外国人登録者をしている人の数は、全人口の約5.7%に及ぶそうです。この比率でさえ驚異的ですが、景気が落ち込む前のピーク時には、なんと7%を超える外国人がくらしていたそうです。ちなみに、昨年度の福山市で約1.3%です。

このような実態にあわせ、可児市では他都市に比べると比較的早い時期から外国人への支援事業が盛んにおこなわれていたということで、数ある取り組みの中から、今回は「可児市多文化共生センター（愛称：フレビア）」を視察させていただきました。

【活動内容】

「可児市多文化共生センター（以後フレビアと記す）」は、可児市が1億2700万円をかけて造りました。運営は「NPO法人可児市国際交流協会」に任されています。

このフレビアで実際におこなわれている活動ですが、可児市にくらす外国人の生活を保障するために、日本語教室、就職支援、教育支援、生活相談、交流活動、支援者育成などが中心になっています。

日本語教室は、多種多様な人たちが受講できるように、昼間、夜間、大人向け、子ども向け、入門編、日常会話編など、様々な形式のものが用意されていて、より多くの外国人が言葉の壁を乗り越えられるよう、きめ細かい取り組みをしているそうです。

就職支援では、ヘルパー2級やフォークリフトの資格取得に向けた講座や研修を開催し、生活基盤の安定を目指した取り組みも実施しているということでした。

生活相談でも、一般的な相談業務や情報提供のほかに、地域に根ざしたくらしができるようにと、資源回収への参加や、防災意識向上のための劇などもおこなわれています。

また、子どもたちのための教育支援活動にも力を入れていて、私はこのような活動を体感したことがなかったので、とても印象的でした。

元々、市内にくらす外国人の割合が多い可児市ではありますが、学校ではそれがさらに顕著になるようで、全校児童数・生徒数の約10%が外国籍の子どもだと聞き、非常に驚きました。そのため、フレビアでは、就学前準備活動、就学支援、進学支援について、それぞれの取り組みに力を入れています。

視察時に、フレビアでブラジル籍とフィリピン籍の子どもたちが一緒に楽しそうに勉強している姿を見て、とてもうらやましく思いました。

自身が外国人である、あるいは両親のどちらかが外国人であるというような同じタイプのアイデンティティを持つ子どもたちは、直接、そのことを宣言し合わなくても感覚的に何か肌で感じるものがあるのでしょうか、ここにいる子どもたちの表情は母に守られている幼子のように穏やかでした。外国籍の子どもたちにとって、自分たちの居場所が保証され、集う場所があるということが、とても心強く、そして安心につながっているのだと思いました。

このような取り組みを推進している可児市にも、課題はあります。多文化共生の地域づくりの一環として開催している「多文化共生フェスティバル」という行事があるのですが、外国人の参加者数に比べて日本人の参加者数が非常に少ないということです。

これは、多文化共生にとりくんでいるほとんどの地域でぶつかる壁だと思いますが、フレビアにおいても例外ではなく、今後は地域住民に対して多文化共生の輪を広げていく取り組みにも知恵と力を注ぎたいとおっしゃられていました。

【まとめ】

フレビアでとりくんでいる教育や就職などの支援活動や、各種交流行事など、全てに共通するねらいは「地域に根ざしてくらす」ことにあります。そのための教育であり、仕事であり、環境づくりであり、交流行事であるという考え方に共感を覚えました。

これからの社会において外国人はもはや「お客さん」ではありません。「いずれ帰国するだろう」といった姿勢をどこかに含んだ一時的な生活支援や交流活動では意味をなさない時代が、既に到来しているのです。こういった時代の変化をいち早く捉えた可児市の取り組みは、素晴らしいと感じました。

人口比率では可児市に及ばないものの、福山市の外国人登録者数は既に可児市を超えているのです。ですから、福山市においても、新しい時代の国際化や多文化共生の取り組みを推進していくためには、この「可児市多文化共生センター（フレビア）」のような存在が必要不可欠だと思います。

私たち外国人は、言葉の壁や文化の壁に閉じこもって、勝手気ままにくらしているわけではありません。「いずれ帰るから」という安易な思いで生活しているわけでもありません。

私たちも地域でくらす生活者です。しかし、現在、地域に根ざしてくらすための様々な相談や交流、また支援について、どこに情報があるのか、どこに聞いたらいいのかさえわからない状況があります。もし、フレビアのような存在が福山市にもあれば、「あそこに行けばなんとかなる」という思いで外国人が多数訪れることでしょう。そうすれば、様々な支援活動も、必要としている人に適切に注がれていくことになり、より効果的に事業が推進していくと思います。

また、これによって、私たち外国人がくらしやすくなるだけでなく、共にくらす市民のみなさまとのつながりも深まっていきますから、様々な地域活動も活性化されていきます。まさに多文化共生のまちづくりの目指すべき姿ではないでしょうか。

ぜひとも、福山市にも多文化共生の拠点を設置していただきたいという願いを、市への要望として挙げさせていただき、本報告書の終わりとさせていただきます。

Bản báo cáo

Ngày 28 tháng 6 năm 2012

Địa điểm: Trung tâm cộng đồng đa văn hoá thành phố Kani Tỉnh Gifu (Tên: FUREBIA)

Thành phố Kani là thành phố nhỏ, dân số khoảng 100000 người, nằm phía trung nam tỉnh Gifu Nơi có nhiều nhà máy sản xuất linh kiện xe hơi , vì vậy có rất nhiều người nước ngoài đến sống và làm việc.

Số người nước ngoài đăng ký nghe nói chiếm khoảng 10% phần nhiều là người Brazil và người Philipin.

Do người nước ngoài nhiều, và có rất nhiều hoạt động nên Chúng tôi đã đến tham quan và học hỏi cách tổ chức hoạt động của trung tâm 「Cộng đồng đa văn hoá (FUREBIA)」 .

Thành phố kani đã xây dựng 「Trung tâm cộng đồng đa văn hoá (FUREBIA)」 .

Nhưng hội giao lưu quốc tế thành phố Kani NPO quản lý.

Các hoạt động thực tế được tổ chức với mục đích bảo vệ cuộc sống người nước ngoài sống tại thành phố Kani như mở lớp tiếng Nhật, hỗ trợ các chuyên môn để đi làm, hỗ trợ giáo dục, buổi hỏi đáp thắc mắc về cuộc sống, hoạt động giao lưu, giáo dục cho người hỗ trợ.

Lớp tiếng Nhật: Mở những lớp cho nhiều người nước, nhiều dạng, vào ban ngày, ban đêm, cho người lớn, trẻ em, lớp nhập môn, lớp giao tiếp thông dụng hàng ngày.

Về hỗ trợ các chuyên môn: như mở các lớp học lái xe nâng hàng hay bằng cấp 2 chăm sóc người già.

Về buổi hỏi đáp thắc mắc: với mục đích giúp người nước ngoài gần gũi với cộng đồng người Nhật, và trao đổi những thông tin.

Trung tâm rất chú trọng về hoạt động giáo dục cho trẻ em. Những hoạt động này ở Fukuyama không có, nên có ấn tượng mạnh cho tôi.

Nhất là khi nghe nói "trường học người nước ngoài chiếm 10%", đã làm tôi rất bất ngờ. Lúc đi tham quan, tôi đã nhìn thấy các em nhỏ người philipin và người Brazil đang vui vẻ học bài, làm tôi rất cảm động.

Cùng là người nước ngoài sống chung một cộng đồng, cho dù không nói ra, nhưng tôi nghĩ các em cũng có cảm giác, cùng hi vọng, những em nhỏ học ở đây rất tự tin giống như đang được mẹ bảo vệ, Trung tâm FUREBIA là nơi bảo vệ chúng làm chúng tự tin, an tâm hơn.

Ngoài ra hàng năm Trung tâm FUREBIA còn tổ chức" lễ hội cộng đồng đa văn hoá "nhưng nghe nói người nước ngoài đến tham gia rất đông, nhưng người Nhật lại rất ít.

Điều này tôi nghĩ đó là bức tường khó lắm mới vượt qua không chỉ ở thành phố Kani mà cũng là vấn đề đáng cần giải đáp của các thành phố khác. Nghe nói năm này thành phố Kani sẽ cố gắng tổ chức hoạt động nhằm lôi kéo người Nhật gần gũi với người nước ngoài hơn.

Với xã hội hiện này người nước ngoài không phải là "khách" không còn tư tưởng "kê mặc, sẽ có ngày sẽ trở về nước" mà là xã hội cùng sinh hoạt cùng chung sống, cùng giúp đỡ lẫn nhau.

Thành phố Fukuyama nơi chúng ta đang sống, cũng không ít người nước ngoài, Tôi nghĩ cũng cần thiết những hoạt động như FUREBIA.

Chúng tôi là người nước ngoài bị ngăn cách bởi bức tường văn hoá, ngôn ngữ, nhưng không phải như xã hội xưa " thích ở thì ở thích về thì về". Chúng tôi là người cùng sinh sống với cộng đồng Nhật, nhưng hiện nay về hỏi đáp thắc mắc, giao lưu nhằm gắn bó với cộng đồng thì không có, muốn hỏi gì, phải đi đâu thì không biết. Nếu Fukuyama cũng có trung tâm giống như FUREBIA, thì tôi nghĩ rất tốt, sẽ làm chúng tôi được an tâm hơn.Và những người muốn giao lưu sẽ tụ tập lại giúp những hoạt động sẽ có kết quả hơn.

Điều này không chỉ giúp cho người nước ngoài chúng tôi mà còn làm cầu nối cho người Nhật và người nước ngoài, cho người dân có cuộc sống yên tâm hơn.

Vì vậy tôi rất mong thành phố Fukuyama cũng thành lập một nơi 「Cộng đồng đa văn hoá」 .

岐阜県 可児市多文化共生センター FREVIA 訪問の感想

アミーゴ地球市民 DJ 前田ミチコ

まず感じたのは、外国人の人々が気楽に行ってみようかなと思ったら、FREVIEWIA がある。そして、何か相談をしようと思ったらそこにはスタッフがいる。それが良いと思いました。

子どもが小、中、高校に入学する前には、それぞれの学校へ行ったときの過ごし方を練習できる教室があるのがとても良く、また、色んな国の人たちとの交流は、お互いの料理を食べあったり、文化にまずは親しくなり、そのことを通じて、無理することなく、自然に文化の違いを理解し合うのが良いと思いました。

今回、可児市を見ることによって、福山の国際交流の過去を振り返ることに役立ち、経済不況になったことによって、状況は以前と大きく変わって、これまでは、在留外国人にいかにか日本の文化になじんでもらうかということが第一であったことに対して、これからは多文化共生にたがいに親しみ、それぞれの良いところを学んで、日本の将来のあり方を見つめて、変革していく試みに少しでも役立てたら良いと感じました。

VISITA AO CENTRO MULTICULTURAL DE KANI - FREVIA

(PROVÍNCIA DE GIFU) - Michiko Maeda

Meu ponto de vista:

- Qualquer residente estrangeiro que, despreocupadamente queira ir, ou que tenha alguma consulta a fazer, sempre tem alguém no local para ser atendido.
- À criança antes de ingressar no Primário, Ginásio ou Colégio japonês, o FREVIA oferece classe preparatório de estudo e de vida escolar em geral.
- Dentre muitas atividades, também, me chamou atenção do Encontro de Confraternização de Culinária Internacional. Pessoas de vários países experimentando pratos de diferentes lugares do mundo, num ambiente fraternal e amistoso em contato com diversas culturas .

A visita a Kani, me fez lembrar da Associação Internacional de Fukuyama, tendo como base, o residente estrangeiro familiarizar-se com a cultura japonesa. Com a situação econômica atual em crise, uma época bem diferente da de anterior, seria melhor cada um se familiarizar com a sociedade multicultural crescente e tentar adquirir e aprender o lado do bom e agradável. E pensando no futuro do Japão, provavelmente, FREVIA servirá como um modelo exemplar no processo de transformação.

可児市視察研修に参加して

福山市松永生涯学習センター 常友 浩子

今回視察に行った岐阜県可児市は、前回の「たかとりコミュニティセンター」の民間運営とは違い、行政とNPOが協力して運営しているということで、これから「多文化共生」をすすめていく福山市にとって、大変参考になると思い参加しました。

可児市は、人口約10万人に対して、外国人登録者数は、約5,765人（約5.7%）です。

2008年のピーク時には、7,518人（約7.2%）に達したこともあるそうです。ちなみに、現在の福山市は、人口約47万人に対して、約6,500人（約1.4%）です。可児市の国籍別の比率をみると、ブラジル籍が52.9%、フィリピン籍が32.1%で、この2カ国で85%を占めていることが特徴的です。在留資格は、永住者53.6%、定住者が26.3%、日本人の配偶者は、6.9%です。

市内や近隣にある大きな工業団地帯や自動車・家電の製造などの労働力として日本にやってきた家族が多く暮らしているそうです。

20人に1人以上の割合で住んでいる労働者とその家族の外国人市民は、働き盛りの18歳から40歳代の若い世代であり、他の市町と同じく高齢化のすすむ可児市にとって、まちづくりや市の運営になくてはならない大きな力となる大切な人材だと思います。例えば、災害時も、若い世代の外国人市民なので、ある程度、多言語の情報があれば理解でき、その力を高齢者の支援活動に活かすこともできます。

そのため、可児市は、2008年に1億3000万円をかけた「可児市多文化共生センター(フレビア)」を建設し、多文化共生の拠点施設としました。

その運営には、「NPO法人可児市国際交流協会」があたっています。この国際交流協会は、急激に増えた外国人市民のために2000年に設立され、市の施設の一角で運営されていましたが、この多文化共生センターの「指定管理者」となれるように、NPO法人となったそうです。そのため、「華々しい海外との交流を目的にするのではなく、最初から内なる国際化である、多文化共生をすすめることを目的としている」と言われたことが、とても印象的でした。

市は、国際交流協会に、年間約1,500万円の委託料（5年間委託）を払っていますが、その予算や他の補助金などを運営資金として、常勤職員1人、非常勤職員6人で管理、事業企画、運営を行っています。職員で、多言語の情報紙などを作成し、地域のイベントやフレビアの事業、生活などの情報提供や、外国語相談、交流イベントの企画実施、日本語支援などをおこなっています。

特に15歳を越えた子どもたちの就学支援（進学支援）や母語支援などにも力を入れているそうです。この若者たちの就学や就労を支援することが、今後の労働者の育成となり、この地に住み続けることで、国や市町の税収入にもつながり、多文化なまちの創造と活性化につながるのだと思います。福山市でも、永住・定住希望の子どもたちの進路保障が大きな課題となっていると思います。

このセンターは、可児市の多文化共生の拠点であり、複数の言語教室、母語教室、進路保障の学習や交流イベントを通して、外国人市民どうしや日本人との交流の場として活かされていると思いました。

可児市の国際化施策の基本理念は、「国際化が日常化された地域社会の実現」であり、「外国人市民も地域社会を構成する同じ生活者として受けとめ、お互いの文化のちがいを認め合い、社会参画を促し、共に安心して生活していくことのできる多文化共生のまちづくりをしていく」ことを目標に進められています。

私たちの周りにも、10年前、20年前と比べると、多くの外国人市民が暮らすようになり、お互いが関わり合いながら生活しなくてはならない存在となってきました。町で出会うこともあたりまえとなってきましたが、今後は、町内会などにも参加できて、みんなが思いの言える場をつくっていくことができれば、より多様なまちづくりができると思います。そのためには、個人の関わりや町ぐるみの取組み、行政のおこなうべきことなどがあると思います。

福山市には、可児市より多くの外国人市民が暮らしています。しかし、多文化共生センターの有無だけをとっても、行政サービスとしては、十分できていないことになります。

2008年に策定された国際化推進プランに基づき、「市民が世界の人々とともに生きるまち」を、福山市の総合計画に掲げる将来都市像「にぎわい しあわせ あふれる躍動都市～ばらのまち福山～」を実現するための目標のひとつとし、『国際交流の推進』と『多文化共生の推進』に本気で取り組んでいく必要があります。

最後に・・・

この視察研修は、まさに多文化共生の旅で、参加者の国籍や立場も多様でした。道中でのお話だけでも、多くの課題が見えてきました。出会うこと、話をすること、考え合うことで、気づくことができ、改善していくことができると思います。この旅では、みなさんと大変有意義な時間を過ごすことができました。

可児市多文化共生センター・フレビアを視察して

福山市市民局まちづくり推進部人権推進課 高橋 雅和

1 外国人登録者の現状

国内において外国人登録者数が増加する中、福山市に住む外国人登録者数も同様に増加傾向にあり、1985年（昭和60年）12月末に1,640人であった外国人登録者数は、2011年（平成23年）12月末には6,465人となり、26年の間に4倍になっています。2012年（平成24年）6月末現在では、52カ国、6,426人となっています。

人口に占める外国人登録者の割合は1.36%となり、国籍別で見ると、1985年（昭和60年）の時点では、韓国・朝鮮籍の人の割合が外国人登録者数全体の89.32%（1,465人）を占めていたが、1990年（平成2年）の「出入国管理及び難民認定法」の改正により、南米からの日系人の割合が高くなった。また、留学生や国際結婚による増加も見られます。

加えて、1993年（平成5年）に始まった外国人研修・技能実習制度の普及により、中国をはじめ、フィリピン、ベトナム、インドネシアなどのアジアの国々からの研修生や技能実習生が大幅に増加していることなどから、多国籍化が進むとともに、長く住む外国人が増えている傾向があり、地域の一員として暮らせるまちづくりが必要となっています。また、日本に住む外国人は、それぞれの在留資格によって在留条件が異なるため、生活事情が異なることから、それぞれが生活上抱えている問題も複雑多岐にわたっており、行政として、ボランティア、NPO・NGO団体などと連携を図りながら、問題の解決に取り組んでいくことが必要となっています。

2 外国人相談の現状

1990年（平成2年）の「入管法」の改正により、日本人の移民が多かったブラジル、ペルーなどの南米諸国から日系人とその家族の入国が急増したため、外国人労働者も増加することとなり、社会保険や労働保険の未加入問題などが浮上しています。また、言葉の問題をはじめ、子どもの教育、医療、税金など生活上の様々な課題が生じており、こうした課題に対応するため、1992年（平成4年）にポルトガル語・スペイン語による生活相談窓口を開設し、南米からの日系人を中心とした人々の生活相談に応じています。

2004年（平成16年）には、中国人や中国帰国者、その家族を対象に、中国語による生活相談窓口を開設しています。

また、ここ数年、日系人の派遣労働者や中国を中心としたアジアの国々からの外国人研修生・技能実習生が増加しており、労働についての相談にも応じており、相談内容については、外国人登録やビザの手続き、保健・福祉・医療関係、保育・教育、税金、労働、住宅、国際結婚による夫婦・家族間の問題など生活全般にわたっており、相談件数は年々増加しています。

こうした中、国籍に関係なく行政サービスを提供できるよう、外国人相談窓口と各関係機関や担当部署との連携を強化するとともに、日本の諸制度についての知識や日本語能力を十分に有していない人に対し、簡単で分かりやすい日本語や、多言語での情報提供に努めることが必要となっています。

3 現状と課題

(1) 外国人市民の人権尊重

外国人市民は、国籍、民族、文化などの違いから差別や偏見により、学校や職場において不当な扱いを受ける場合や、地域の一員として地域社会に入りにくい場合があり、すべての人々の人権を尊重し、相互理解を深めるための事業や啓発活動を推進しています。

今後、このような差別や偏見を解消し、多文化共生社会をめざしていく上で、人権尊重の意識づくりは重要であり、だれもがお互いの違いを認め合い、正しい理解と認識を深めることができるよう、啓発・学習活動を推進することにより、人権文化が根付いた地域社会を実現することが必要です。

(2) 外国人市民に対する行政サービス

日本の諸制度についての知識が乏しい場合や、日本語能力を十分に有していない外国人市民は、行政から得られる情報が限られていることから、必要な行政サービスを受けることができない場合があり、だれもが地域の一員として安心して暮らせるよう、簡単で分かりやすい日本語や多言語での情報提供、コミュニケーション面での支援体制及び各関係機関との連携による総合的な相談体制の充実が求められています。

(3) 外国人市民との共生

外国人市民は、言葉や習慣の違いにより、地域住民との間に摩擦が生じたり、地域で孤立することがあり、だれもが安心して暮らすためには、地域住民同士がともに、地域活動を通してお互いを理解することが必要です。

そのために、同じ地域住民として交流ができる場の提供や、地域の一員として社会参加できる仕組みを整えることが必要です。

(4) 国際交流・国際協力

福山市では、教育交流も含め5つの都市と親善友好都市提携をしており、行政間や市民間での人的交流や青少年のホームステイ、スポーツ分野などを通しての交流、経済交流などにおいて、相互理解のもと、親善・友好を図ってきました。

今後も、行政レベルで各都市の特色や地域性を生かした交流活動を進めるとともに、一人ひとりの国際意識を高めるためにも市民レベルでの交流をさらに促進することが大切です。

地域での国際交流においては、自治(町内)会を単位とした海外都市との交流や多文化共生をテーマに文化祭を開催する学区もあり、市民や団体などによる自主的な交流も行われています。ふくやま国際交流協会では、異文化交流事業、研修・講習会の開催、情報提供事業などを実施しています。

また、ボランティア、NPO・NGO団体などとの連携を図り、情報を共有しながら、市民レベルでの草の根交流を推進し、地域における国際交流を行っており、今後も市民や団体などとの協働による地域での国際交流を推進することが大切です。

4 可児市多文化共生センター・フレビアを視察して

可児市は、名古屋市まで名鉄電車を利用すると1時間かからないため、名古屋市のベッドタウンとしての要素が大きく、自動車産業が盛んであり、自動車部品の下請工場が数多く存在するため、外国人労働者も多く、外国人登録者数はフレビアが開館した2008年には7%を超え、隣接する美濃加茂市と共に国際都市として知られています。(2012年4月1日現在は、5.7%)

今回視察に行ったのは平日だった為か、駅前思ったほどの賑やかさはなかったものの、外国人夫婦がベビーカーを押す姿が見られました。

フレビアは沿線にあるため駅からも見る事ができましたが、シルバーの外観が眩しかったのが印象的でした。

改札を出て急な地下道をくぐり、歩いて約3分のところに目的の建物はありましたが、玄関前で記念撮影 etc. をしていると、職員の方がわざわざ出迎えてくれました。

中に入ると、オープンスペースにテーブルが設置してあり、天井も高く、資料室や多目的室の壁がガラス張りになっており、開放感のある造りになっていました。

館内には、所狭しとさまざまな情報誌やポスターがあり、日本語を個別レッスンしている姿や研修室や多目的室で子どもたちが交流する姿も見られ活気を感じました。

研修室で市の多文化共生係長さんと管理運営を行っている国際交流協会の事務局長さんから、可児市の概要や業務内容について説明を受けました。

建築費は約1.27億円、指定管理料は年間約1,500万円ということでした。

主な事業は、情報収集・発信・提供事業や日本語の学習支援事業、相談事業、市民交流事業等の指定管理業務のほかに、自主事業として日本語指導支援事業、多文化共生交流支援、情報交流事業など幅広い事業が展開されており、今年の5月末現在での来館者は、延べ135,272人で、1日平均100名ほどが利用しており、多文化共生の拠点となっていることを実感しました。

地域における多文化共生の推進のためには、外国人市民を対象とした事業のみならず、地域住民への多文化共生に関する意識啓発も重要となり、国籍や文化の違いにかかわらず、地域で共に生活する市民として、お互いを理解することが何よりも必要となります。

また、外国人市民との交流は、地域住民自らの異文化理解力の向上や地域社会の活性化にもつながります。

さらに、地域社会の中で孤立することがないように、日本語や日本社会に関する学習を支援し、自立を促すとともに、地域社会へ参画できる仕組みを整備し、外国人市民が能力を最大限に発揮できるような環境づくりが求められます。

日本人にとって住みやすいまち、外国人市民にとっても住みやすく、また、外国人市民にとって住みやすいまち、日本人にとっても住みやすいまちであるように、多文化共生の地域づくりは、各主体の役割分担と連携・協働及び「ユニバーサルデザイン」の視点を取り入れる必要があると感じました。

より望ましい「多文化共生センター」機能について、引き続き考えていきたいと思えます。

福山に魅力あふれる多文化共生センターを

村田 民雄

(福山市多文化共生の場づくり推進委員会・事務局長)

可児市多文化共生センターは、他の参加者も触れているように、可児市が1億2700万円をかけて造ったもので、運営は「NPO法人可児市国際交流センター」が「指定管理者」として行っています。しかし、このような場合、「金も出すが口も出す」ケースが多いのですが、可児市の基本姿勢として「金は出すが口は出さない」とのことでした。

私は、この一点を見ても、ここが「公設民営」のモデルケースと言われる所以だと感じました。相互の協力関係はうまく行き、添付の「平成24年度重点事業」(P18)を見るだけで、その意欲と協力関係が伝わってきます。

この重点事業の中で、「子どもの教育における共生」に関する事業がきめ細かく、継続して実施されていることに大きな刺激を受けました。なぜなら、その必要性は分かっている、福山市においては、ほとんど手つかずの事業だからです。さらに、「日本語学習支援、就学支援等の事業」(P19～20 資料番号3)もきめ細かく実施されています。

訪問したのは木曜日の午後でしたが、何組かの学習者やフィリピン籍やブラジル籍の子どもたちが熱心に勉強をしていました。2008年度の開館以来、国籍を問わず多くの方が利用され、2008年のオープン以降、2012年5月28日現在で135,272人が利用しているとのことでした。

可児市は、人口約10万人ですが、外国人登録者数は5,765人(2012年4月)で、総人口に占める割合は5.7%です。確かに人口比率は高いのですが、福山市と比べると絶対数では低いものとなっています(福山市の外国人登録者数は約6,500人)。

多文化共生センターに不可欠な機能は、交流・学習・発信だと考えていますが、このセンターで特に気に入ったことは、気軽にパーティーもできるし、飲食もできるとのことです。「多文化共生センター」に欠かせないリラックスした雰囲気づくりができていたことでした。

なお、この施設の雰囲気をつかんでいただくため、「可児市多文化共生センター(フレビア)」のリーフレットと併せ、写真を掲載しています。

この先進事例を参考に、福山において魅力あふれる「多文化共生センター」を創りたいと強く思っています。

※「多文化共生」や「多文化共生センター」への理解を深めるため、2012年11月17日(土)、24日(土)および12月1日(土)の3日間、福山市立大学において講座を開催します。17日の講座には「NPO法人可児市国際交流協会」の各務眞弓・事務局長を講師としてお招きします。